京KYOTIAN I.D.
京のおきばりさん

原料となる「楮（こうぞ）」（黒谷では「かご」と呼ぶ）を煮た後、柔らかくなったものを清流の中で水洗いする「楮みだし」という作業。灰汁と細かなゴミを取り除く作業で、冬場は「腹痛になるほど寒い」厳しい工程である

漉いた和紙を乾かす作業は、ボイラーで温められている鉄板で行なう。板に貼りつけて天日干しすることもあるが、最近では和紙の厚さや大きさによって温度を調整できる鉄板の方が好んで使用されるのだとか

「贈りもの」をテーマにした作品は1パネル3800円。また、ハタノ氏が漉いた和紙をバッグやポーチにしたものは、パートナーであるユキさんの作品。水玉などのデザインは、ハタノ氏が手がけている

information

クラフト展「工房からの風」に出展
日程：10月20日・21日
会場：ニッケコルトンプラザ
☎047・378・3551
千葉県市川市鬼高1-1-1

和紙を使った内装も請負可能。
興味のある人は、aaawtaaa@ybb.ne.jpまで。
http://blogs.yahoo.co.jp/aaawtaaa

和紙職人

ハタノ ワタル

HATANO WATARU

【プロフィール】
1971年11月8日生まれ。淡路島出身。多摩美術大学への進学を機に上京。卒業後、デザイナーとして就職するも、東京での生活に違和感を抱き、北海道へ。1年8ヵ月の農業生活を経て、綾部市へ移住。同市にある黒谷和紙協同組合の門を叩き、今年で11年目

和紙の持つ魅力を再確認できる、ものづくりの提案を使命と思う。

10年の修業期間を経て、「ようやく表に出ようという気になった」ハタノ氏。日々の作業に追われていたのが、段取りを組んで進められるようになるまでに10年かかった。助走期間を過ぎ、踏み切るタイミング。そこで、百万遍の手づくり市に出展したり、ギャラリーでの個展を開催し始めるようになった。昔ながらの製法でつくる黒谷和紙を需要と供給の面で支えているのは、70代を主とする年輩層。だからこそ、「同世代の人たちにもっと和紙の魅力を伝えんとやばいんちゃうかな」という焦燥感が拭えない。

北海道での1年サイクルの農業生活の中で、もっと早いサイクルでできる仕事がしたいと考えたハタノ氏。大学では油絵を専攻し、いまでも絵描きの夢を諦めてはいない。だからこそ、「表現者として、地球にやさしく、自分に気持ち良く」できる仕事を求めたという。「お金うんぬんじゃなく、納得のいくものづくりがしたい」と考え、行き着いたのが画を描く上で馴染みがあった和紙の生産地・黒谷だった。11年前は20軒あった工房も、いまではたったの3軒。このままでは「10年後も一般的な流通があるかどうかは疑問」だと、切実な危機感を抱く。

「土、木、紙は日本での家づくりに欠かせない三大原料。だからこそ、幅広く使えるし、何でもできる」と、和紙の持つ可能性を確信している。「和紙は、竹や金属みたいに大衆的な道具までいかないのが現状。あくまでも素材。だから、こんな使い方ができるよと提案することが大事だと思う」。日常生活の中では洋紙の勢いに押されている和紙。だが、独特な風合いは洋紙にはない魅力に溢れている。厚みも自由自在。切ったり、貼ったりと加工もお手のもの。色も塗れるし、画も描ける。さらには、濡れても大丈夫な素材であり、楮の量を調節して立体に仕上げることも可能だ。和紙で世界を狙うことも夢物語ではないはず。

「作品でガツンと稼いで、山に入って楮をつくって、若い子たちに紙漉かせて、また作品つくって…そうできたらいい」。いま、原料をつくり、加工してくれている年配者たちの作業を、近い将来、誰かがやらなければならない。彼からは、それを背負う覚悟が感じられる。

全国でいま紙がアツイ。それは、肌で感じる現実だとハタノ氏は言う。だが、土や木、布、ガラスなどの作品に比べて、紙でものづくりをする人はまだまだ少ないのが実状でもある。「こんなに便利な素材は他にはない。それをひとりでも多くの人に伝えたい」――それこそが、彼の願い。